大つごもり　樋口一葉

作者

樋口一葉

本名はなつ（なつ子、夏、夏子）。東京府に生まれる。幼少期から学びたい意志は強かったが、当時は女性が教育を受ける機会は限られており、家が経済的に豊かでなかったこともあって、一時は中断した。一葉の強い希望により、明治十九（一八八六）年、父の知人の紹介で、中島歌子の歌塾「萩の舎」に入門した。和歌や平安王朝の物語、千蔭流の書などを学ぶが、周囲には華族や政治家の夫人や令嬢が多く、肩身の狭い思いをしたことが日記に記されている。

長男である兄の病死、父の死が打ち続き、次兄もそれ以前に勘当されて家を出ていたことから、明治二十二（一八八九）年、十七歳で、母と妹からなる家を背負う戸主となった。当時の法律では、原則として戸主になるのは男性であり、女性がなるのは例外的な状況に限られていた。同じころ、萩の舎の先輩である三宅花圃が、小説『藪の鶯』（明治二十一）を書き、出版した。小説は新時代のメディアであり、原稿料が得られることにも惹かれ、小説執筆を志す。妹の伝手をたどり、新聞小説の書き手であった半井桃水を訪ね、弟子入りする。桃水のバックアップを受け作家デビューをしたが、職業としてすぐに軌道に乗るわけではなく、周囲の中傷などにより桃水からも離れた。

注目され始めたのは、『文学界』に「雪の日」（明治二十六）を掲載したころからである。生計のためには、並行して吉原遊郭近くの下谷龍泉寺町（現在の台東区竜泉一丁目）で雑貨店を営んだり、萩の舎での教授を手伝うなど苦心が続くが、新進の雑誌であった『文学界』に集う作家たちとの交流も開かれ、「たけくらべ」（明治二十八～二十九）は森鷗外の高い評価を得た。作品は、女性をとりまく閉塞的な境遇を生きる主人公たちの複雑な思いを雅文体で描く、独自な境地に進んでいた。しかし、既に結核にかかっており、当時の医療では治療もままならず、亡くなった。作品には、「大つごもり」（明治二十七）、「にごりえ」（明治二十八）、「十三夜」（明治二十八）など。

出典

本文は『樋口一葉全集』第一巻（筑摩書房　昭和四十九）によった。教科書表記の統一による変更のほかは、本文に異同はない。

語句の研究

●一七七ページ

キー・ポイント　上14 大つごもり　大晦日。江戸期から続く慣習で、借金などを清算する期限。

キー・ポイント　上15 三之助　主人公のお峰はすでに父母を亡くし、伯父伯母に引き取られたが、伯父は病に倒れ、今は零落している。三之助は、伯父伯母の息子で八歳。お峰とは姉弟のような間柄。既に蜆売りをして家計を助けている。三之助の様子や伯父からの伝言には、この家族の誠実さがうかがわれる。

上15 白銀台町　現在の東京都港区に存在した地名。

下14 仕儀　ことのなりゆき。

キー・ポイント　下15 約束の物　お峰が伯父に、奉公先からお金を借りるように頼まれた、その金。

下15 御新造　ごしんぞ(「ごしんぞう」の音変化)。他人の妻を呼ぶ語。古くは武家で使われたが、だんだん富裕な商家でも使われるようになった。ここでは、お峰の奉公先の山村家の奥様。

下16 子細　詳しい事情。

下18 追羽子　羽根つき遊び。

下18 余念なく　夢中で。

●一七八ページ

キー・ポイント　上1 若旦那　奉公先の山村家の長男石之助のこと。

上6 硯の引出し　かけ硯の引き出し。かけ硯は、硯や墨を入れておく箱で、下に引き出しがついて小物などを入れる。

上6 束　ここではお札の束。

キー・ポイント　上8 見し人なしと思へるは

愚かや　「愚かや」は語り手の評価。近代小説は三人称の場合、次第に語り手の人間らしい特徴を減じ、カメラのように出来事を写すことを目指していく。このように語り手の存在感があるのは独特の形式。

鑑賞

主人公のお峰は、奉公先・山村家の主人の人使いが荒くても、誠実に務める人柄である。父母亡きあとに面倒を見てくれた伯父伯母を大切に思い、伯父が病に倒れたというので心配しているが、奉公人には見舞う自由もない。やっとのことで駆けつけると、働けなくなり借金をした利子のため、大晦日までに山村家からせめて二円借りてもらえないかと頼まれる。

窮状を見て請け合うお峰だが、山村家は富裕でも普段から他人には金を惜しむたちで、勇気を出して御新造に頼んでみたものの、御新造は機嫌が悪く、冷たくあしらわれる。御新造の機嫌が悪いのは、先妻の息子で気まずい仲の石之助がこの時は家にいたからである。石之助は自分をないがしろにする家族関係が面白くなくぶらぶらと遊び暮らしているが、貧乏な仲間に金をばらまくのが道楽という男である。

抜粋は、今日が伯父にお金を渡す約束の大晦日であるのに、御新造は貸してくれぬまま出かけてしまい、お峰が途方に暮れるところに三之助が受け取りにきて、切羽詰まったお峰が引出しから金を盗んでしまう場面。道順を教えられて使いに来た三之助は、姉の迷惑になることを心配しながら、親の窮状が助かる期待で素直に喜んでいる。それを見たお峰は金が借りられなかったとはとても言えず、自分一人が悪人になればいいことと覚悟を決めて金を盗んでしまう。そこに至る逡巡が表現されている。

文章は一息につなげられているが、三之助の姉や父を敬う口ぶりと、年上の思いやりを見せる姉の口調が「　」を使わずに描き分けられている。それらのセリフから動作の描写へ文章はなだらかにつながり、その中で、三之助の視点や心中、お峰から見える情景や心中が切り替わり、それぞれの立場を立体的に浮かび上がらせている。

物語はこの後、石之助が帰宅した父親に金をせびって家を出てゆき、その後大晦日の恒例として家にある金高を勘定するところで、お峰は自らの悪事の露見を覚悟し、伯父伯母に罪を及ぼさないためにどうすればよいか死ぬような思いをする。だが引き出しを検めると、残りの金も全てなくなっており、「引出しの分も拝借致し候　石之助」という書付が見出される。石之助が知らずにしたことか、お峰の行動を知っていてかばったのかはわからない。

新時代のメディアである小説は、概ね言文一致体を志向したが、それは、一葉がこれまで学んできた文体とは大きく違っていた。また、男女の従う規範がことごとく異なっていたそれまでの常識からすれば、女性らしくないと言われる文体でもあった。一葉は、学ぶ先達もいないまま、伝統ある雅文体に近代的な思考を盛るべく試行錯誤した。同時期に再評価された井原西鶴の文体も学んでいると言われる。

（小平麻衣子）